

多様な構成員を持つ大学 ICT 組織への Slack 導入によるコミュニケーション改善の継続調査

森村 吉貴¹⁾, 渥美 紀寿¹⁾, 古村 隆明¹⁾

1) 京都大学 情報環境機構

morimura.yoshitaka.3n@kyoto-u.ac.jp

Continuous Research on How Slack Improves Communication in Academic ICT Division Consisting of Heterogeneous Members

Yoshitaka Morimura¹⁾, Noritoshi Atsumi¹⁾, Takaaki Komura¹⁾

1) Institute for Information Management and Communication, Kyoto University

概要

京都大学情報環境機構は教員・技術職員・事務職員が一丸となって業務を遂行する教職協働型の組織であり、教職員の背景の多様性と物理的な居室の分散性から常に構成員間のコミュニケーションの円滑化が常に課題と考えられていた。筆者らはそのような課題への対応策として 2016 年にチームチャットサービスである Slack を導入することでコミュニケーションの改善を試み、ユーザーアンケートを元にした Slack 利用の評価を 2018 年の大学 ICT 推進協議会年次大会にて報告した。本稿では、その後更に 1 年の運用を経て、Slack に対する教員・技術職員・事務職員の意識や評価がどう変化したかについて報告する。アンケートでは、8 割以上の構成員が Slack の導入によりコミュニケーションが改善されたと回答し、特に事務職員については「改善された」と回答した割合が前年度との比較で 38% も上昇するという結果が見られた。

1 はじめに

京都大学の情報環境機構は学内の ICT に関する企画運用を使命とし、教員・技術職員・事務職員が一丸となって業務遂行する 100 人規模の教職協働型の組織である。ICT に対してエンドユーザ向けのサポートからインフラの運用まで幅場広く担う組織であるため、主なオフィスも 3 箇所のビル（学術情報メディアセンター北館・学術情報メディアセンター南館・事務本部棟）に分散している。このような教職員の背景の多様性と物理的な居室の分散性から、当該機構では構成員間のコミュニケーションの円滑化が常に課題と考えられていた。

筆者らは、当該機構における多様な構成員のコミュニケーションを改善することを目的として、メールよりもリアルタイムかつ連続的なコミュニケーションを実現できるチームチャットツールの Slack の導入を行い、その効果についてユーザーアンケートを元にした利用形態の確認とコミュニケーション改善状況の評価を行った [1]。その結果、入手できる情報量の増加やリアルタイムの情報交換について肯定的な評価が得られ、コミュニケーション改善という目的に対して有益な効

果があったことが示された。一方で、新しいコミュニケーションツールを導入するという試行であることから、より長期的な視点に立ち、継続的な評価を行うことが望ましい。また、2019 年 7 月に近畿大学が全教職員を対象として Slack を導入することを発表するなど [2]、大学 ICT を推進するコミュニケーションツールとして Slack はその存在感を更に増している。そこで本稿では [1] の報告よりさらに一年間の運用を経た結果、組織内のユーザの評価がどのように変化したかに着目し、同様のアンケートを実施し前年度と比較した結果について考察する。

2 Slack 利用形態の概要

導入にあたっては、このようなチャットツールに心理的／技術的に慣れない教職員の負担を考え、チャットツールの読み書きを必須とせず、自発的な利用を期待することとしており、現在もその方向性は変わっていない。しかし、組織内のグループ（掛）によっては運用のルールを定め、メンバーは毎日 Slack の特定チャンネルの確認することとしているグループもある。

現在、当該機構における Slack の利用は大きく以下の 4 つの目的を持っている。

1. チーム内コミュニケーションチャンネル
2. 情報収集用フィード集約
3. 学内システム API 連携
4. 組織間連携共有チャンネル

このうち 1. は Slack サービスの基本機能であり、2.3.4. については外部連携として実現されている。外部連携の全体像については図 1 に示す。

1. のチーム内コミュニケーションについては、組織的な運用のために一定のポリシーを設けて運用を行っている。具体的には、一定以上の情報格付けの情報は記入しないこと、そうでなくとも個人情報に当たる情報の記載はできるだけ避けることを利用者に案内している。電子掲示板でいうところのトピックスレッドにあたる「チャンネル」としては、全体周知のための #general と、非重要事項や雑談のための #random を始めとして、目的別に 48 個のパブリックチャンネルが運用中であり、限定者のみ参加するプライベートチャンネルや特定個人を指定してメッセージを送る DM と組み合わせ利用されている。

また、アカウントの剽窃対策として Slack の提供する二段階認証方式によって安全性を強化している。また、使い終わったチャンネルはクローズすることや、内部情報の誤公開を防ぐためゲストユーザが参加するチャンネルには明示的に「ゲスト有」というプレフィックスをチャンネル名につけることなど、利用の混乱を防ぐための一定のルール整備を開始している。

2. の情報収集用フィード集約については、各人が組織の公式サイトや外部 Blog の更新を把握できるようにするためのフィード集約チャンネルを設けている。これにより各種ニュースの自動購読・未読管理が容易になり、またその記事を元にした議論等がツール内で行われることもある。

また、3. の学内システム API 連携については、運用中の Redmine や Zabbix、Growi といったシステムを Slack に接続し、Slack 上に更新情報を書き出している。また、独自開発の SPAM 通知統計情報ツールや電子証明書発行ツール bot もそのプログラム中に Slack 連携用の API 呼び出しコードを備えて情報を読み書きしている (図 2)。これらはいわゆる ChatOps[3] としてチームチャットと運用をシームレスに接続することを目指しており、教員・技術職員のみならず事務職員もチャットを通じたオペレーション作業を行っている。

4. の組織間連携共有チャンネルについては、Slack

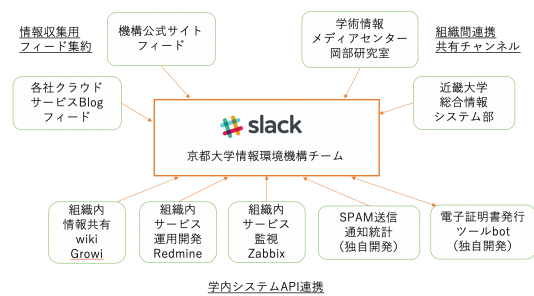


図 1 情報環境機構 Slack の外部連携図

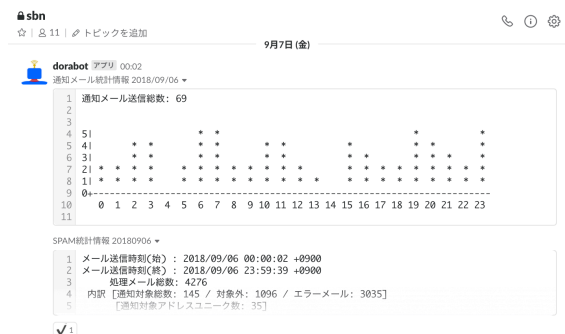


図 2 独自開発のツールの情報をチャット画面に表示させている例

の有償チーム同士であれば共有チャンネル（双方のチームのユーザが任意で加入できる）を作成できるという機能を用いている。これにより、学内／学外の組織間で容易かつリアルタイムに情報交換をすることが可能になっている。

3 Slack 利用形態の推移

当該機構における Slack 導入はいくつかの段階を経て行われた。まず、2015 年 7 月に、当該機構の提供するサービスの将来設計や試行的運用を行う「システムデザイン部門」が部門内のスタッフ 10 名程度で利用を開始した。そのチーム内でコミュニケーション改善の感覚が得られたため、2016 年 5 月、当該機構内での部局単位の導入を行った。この時は、教員と技術職員を中心とし、事務職員は希望者数名という形で運用された。利用するうちに十分な有用性が確認されたため織内での調整を経て恒常的な利用を行う方針で合意し、主にログの無制限の検索を目的として 2018 年 7 月より有料サービスに切り替えた。現在は事務職員を含めたほぼ全員の常勤スタッフに対するアカウント発行を行なっている。また、積極的にゲストアカウントの払い出しを行い、システム構築・運用業者や協力学

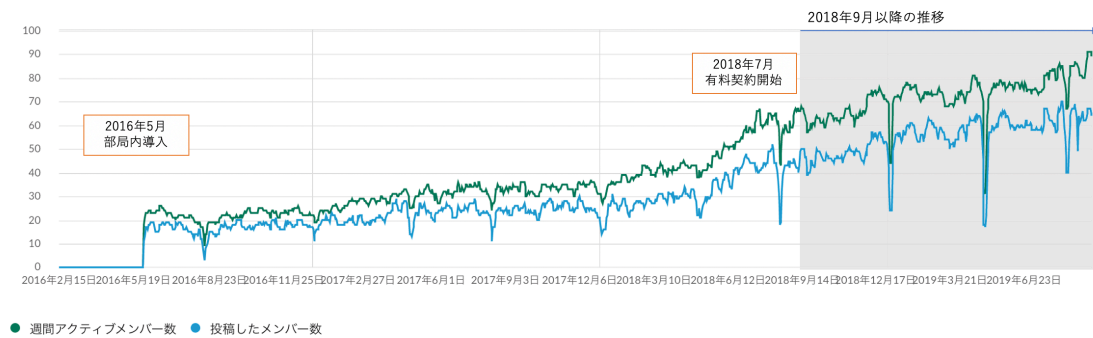


図3 アクティブユーザ数及び投稿ユーザ数の推移 (Slack のアナリティクス機能より)

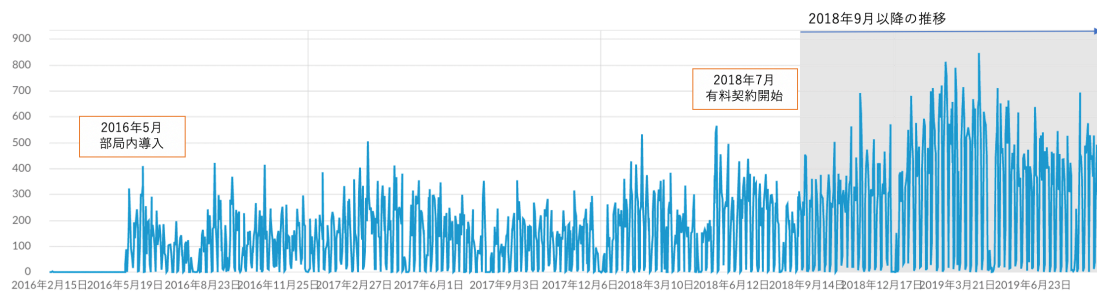


図4 投稿数の推移 (Slack のアナリティクス機能より)

生との連携強化に役立っている。

図3に、2016年5月の部局単位の導入以降の1週間あたりのアクティブユーザ及びメッセージを投稿したユーザ数の推移を示す。アクティブユーザ/メッセージを投稿したユーザ数は増加基調にあり、組織内コミュニケーションとして定着していることが示されている。これらのユーザ数は平日と休日で一週間ごとのサイクルを描いており、夏季休暇、冬季休暇のタイミングでは大きく減少している。

続いて、1日あたりの投稿数の推移を図4に示す。投稿量も季節性の変化はあるものの、ユーザ数と同様増加基調にある。全期間(2016年5月～2019年9月)を通じた総投稿数は220,105件であり、直近1ヶ月間の投稿数は8,547件(1日平均284件)であった。

投稿数のピークを見てみると、大規模障害(2017年3月アカウント発行障害、2018年5月学内VPS基盤障害)や台風などの災害対応(2018年9月台風)でも投稿数の伸びが観察される。また、直近の投稿数ピークのピークはセキュリティインシデントに関する全学連絡(2019年3月～4月)と全学メールのオンプレミス運用からGmailへの以降(2019年4月～5月)が重なった3月～5月であり、この時期の投稿数が全期間を通じて最大となっている。

なお、これらのユーザ数や投稿数に関するデータは、Slackの「アナリティクス」機能により入手している。

4 アンケートによる利用形態の確認と評価

当該機構の構成員のSlackの利用状況の確認と評価を行うため、登録ユーザを対象にSlack内で呼びかけ、Googleフォームによるオンラインアンケートを行った。アンケートは属性による分析を行うことを想定し、記名式とした。構成員の職種の分類は、教員8名、技術職員31名、事務職員20名の計59名である。登録ユーザ数は80名であるため、過半数以上のユーザから回答を得ている。昨年度は教員6名、技術職員21名、事務職員14名の計41名であったので、全ての職種で回答者が増加している。なお、ここでの事務職員は、Webや映像などのコンテンツを制作するための専門性を持つ職員2名を含んでいる。また、本アンケートでは特定のチャンネルにのみ参加するゲストユーザは対象としていない(ゲストユーザは、主に開発・運用業者との連絡用として用いられている)。

アンケートの回答を昨年度の回答比較するにあたっては、以下の点に注意する必要がある。両アンケートは同一組織内のアンケートであるが、昨年度の回答者と本年度の回答者は完全には一致しない。これは、異

表 1 Slack の確認頻度 (括弧内は昨年の回答)

属性	ほぼ常時 (%)	1 日数回 (%)	1 日 1 回～週数回 (%)	通知があれば (%)	ほぼ見ていない (%)	回答者数 (人)
全体	59 (41)	31 (39)	5 (10)	5 (7)	0 (2)	59 (41)
教員	63 (67)	38 (17)	0 (0)	0 (17)	0 (0)	8 (6)
技術職員	65 (48)	16 (38)	10 (5)	10 (5)	0 (5)	31 (21)
事務職員	50 (21)	50 (50)	0 (21)	0 (7)	0 (0)	20 (14)

表 2 Slack を利用する端末種別 (複数回答可、括弧内は昨年の回答)

属性	PC/Mac のアプリ (%)	PC/Mac のブラウザ上 (%)	スマートフォンアプリ (%)	回答者数 (人)
全体	54 (46)	54 (61)	47 (49)	59 (41)
教員	88 (100)	25 (17)	88 (100)	8 (6)
技術職員	52 (33)	58 (76)	52 (48)	31 (21)
事務職員	45 (43)	60 (57)	48 (29)	20 (14)

表 3 Slack を最も利用する端末種別度 (括弧内は昨年の回答)

属性	PC/Mac のアプリ (%)	PC/Mac のブラウザ上 (%)	スマートフォンアプリ (%)	回答者数 (人)
全体	53 (44)	47 (54)	0 (2)	59 (41)
教員	88 (83)	13 (0)	0 (17)	8 (6)
技術職員	48 (33)	42 (67)	0 (0)	31 (21)
事務職員	45 (43)	55 (57)	0	20 (14)

動などにより構成員の出入りがあること、組織内での Slack の普及によりアクティブなユーザが増えていること、アンケート自体が任意であるため同一人物でも年度ごとに回答の有無が異なる場合があることが理由としてあげられる。なお、昨年度回答した 41 人のうち、30 名が本年度のアンケートに回答しており、本年度アンケート回答者の約半数は昨年度の回答者でもある。以降は、回答者数の異なるアンケート間で項目を比較するため、各項目の回答数を構成員の属性ごとの人数で割り、パーセンテージを用いて両者の比較を行うことにする。

本アンケートの完全な原稿は付録 A に記す。以下は、アンケート中の各項目について本年度の回答及び前年度の回答の結果を示しながら、それぞれの結果について考察を行う。

第一に、Slack の確認頻度に関する質問（「Slack をチェックする頻度を回答してください」）の回答結果を表 1 に示す。全体の傾向としてはほぼ常時と答えた者が最も多く、1 日数回と答えた物が多く、Slack が日常的なコミュニケーションツールとして定着したことが伺える。構成員の属性に見ると、「ほぼ常時」と答えた人数は教員・技術職員が事務職員よりやや多い。

昨年度からの比較でいうと、事務職員の利用頻度が大幅に高まり、それが構成員全体の利用頻度の数値を押し上げている。昨年度の時点では、Slack は ICT 技術者からの評価が高く、その間で普及してきた経緯を

持つため、それ以外の背景を持つ事務職員については利用に戸惑いを持つことを懸念していたが、Slack の利用が定着し、組織的な運用を行っている現在では、属性間での利用頻度の際は減少したと言える。

次に、Slack を利用する端末の種別に関する質問（「Slack を利用している端末を全て回答してください」、複数回答可）の回答結果を表 2 に示す。PC/Mac のブラウザ上からの利用、PC/Mac のアプリの利用はほぼ同じ数値となった。約半数のユーザがスマートフォンアプリを利用していると答えており、モバイル環境上のアプリは重要な役割を果たしているといえる。また、教員はブラウザ上の利用が少なく、技術職員・事務職員についてはブラウザ上の利用が比較的多いといえる。これらの傾向は、昨年度と本年度で大きな変化はなかった。

また、Slack を利用する上で、最も良く利用する端末の種別に関する質問（「一番良く利用する端末を回答してください」）も行った（表 3）。一つ前の質問との大きな違いは、スマートフォンアプリを最も良く利用していると答えた構成員がいないことである。この項目についても、本年度と前年度で大きな変化はなかったと考えられる。

次に、コミュニケーションの改善状況に関する質問（「Slack の導入により、導入以前よりコミュニケーションが改善されましたか？」）を行った（表 4）。この質問は Slack の導入に関する質問であるため、導入

表4 コミュニケーションの改善状況度 (括弧内は昨年の回答)

属性	改善された (%)	どちらとも言えない (%)	悪化した (%)	回答者数 (人)
全体	83 (61)	13 (39)	4 (0)	52 (41)
教員	88 (83)	13 (17)	0 (0)	8 (6)
技術職員	78 (62)	15 (38)	7 (0)	31 (21)
事務職員	88 (50)	12 (50)	0 (0)	20 (14)

後に組織に加入した者については「現職場に参加した時から Slack が導入されており、比較できない」という項目を設け、総数から除外することとした。従って、本項目のみ、他の項目より本年度の回答者数の数字が少なくなっていることに留意されたい。

本質問では、改善されたと答えた構成員の数は8割以上となり、前年度の約6割を大きく上回った。特に注目されるのは改善されたと回答した事務職員が前年度の50%から本年度は88%と大幅に向上しており、技術職員の数値を上回っていることである。前述の通り、Slackの導入以前はICT技術の専門家である教員・技術職員と比べて事務職員の反応が悪いこととなることが懸念されたが、新しいツールに慣れたことでポジティブな評価を与えるようになった可能性が考えられる。

上述の質問は導入以前の変化を問うものであり、今後構成員の入れ替えが進むと有効でなくなる問題も考えられる。そこで、次年度以降も継続的な調査を行うことを考慮し、「全体的に見て、Slackの利用はコミュニケーションに良い効果をもたらしていると思いますか?」という質問を新設した(表5)。この項目のみ新設であるため、前年度の数値を併記していない。質問は五件法で「非常にそう思う」「そう思う」「どちらともいえない」「そうは思わない」「全くそうは思わない」の選択肢の中から選択させた。

本質問においては「非常にそう思う」「そう思う」を合わせると全属性で8割を超え、現時点で回答者はポジティブな評価を行っていることがわかる。今後は、この質問に対する回答結果を追跡し、総合的な評価の中心として扱うことが考えられる。

Slack導入のメリットに関する質問(「Slack導入により感じるメリットについて、チェックしてください、複数回答可」)の回答は図6の通りである。回答の選択肢は、「入手できる情報量が増えた」「よりリアルタイムな情報交換が可能になった」「普段はやりとりをしない人とのコミュニケーションが増えた」「自分と異なる部屋・ビルの人とのコミュニケーションが増えた」「通知の強弱がつけられるので情報の取捨選択

が容易になった」「その他」であり、「その他」は自由記述を付記することが可能である。

全体的に高い数値を示したのが「リアルタイムな情報交換が可能になった」であった。前年度と比較すると、技術職員・事務職員でリアルタイム性に対する評価が更に増している一方、元々数値の高かった「入手できる情報量が増えた」という選択肢の数値が全属性に下がっている。これは、質問中の「増えた」という言葉の基準となる時点が明確でないことから、「(前年度からは)増えていない」と解釈された可能性がある。あるいは、次の質問事項で「情報確認の量的に負担を感じる」というデメリットを指摘する者が増えていることから、情報量が増えることが必ずしもメリットではないと受け止められるようになった可能性も考えられる。いずれにせよ、ツールとしてリアルタイム性が評価されている一方で、得られる情報の量的な側面の評価は減じているといえる。

一方、昨年度と本年度と共通する性質として、「通知の強弱による情報の取捨選択」は教員と技術職員・事務職員の間で評価に大きな隔たりがある。これは、教員が普段からより選択的な情報管理を欲しているためとも考えられるが、正確な原因の考察のためには今後の質的・量的な調査を重ねる必要がある。

また、Slack導入のデメリットに関する質問(「Slackの導入により感じるデメリットについて、チェックしてください、複数回答可」)も行なった(図7)。回答の選択肢は、「コミュニケーションの選択肢が増え、情報の入手先がわかりにくくなった」「コミュニケーションの選択肢が増え、情報確認の量的に負担を感じる」「リアルタイム性が高いため、常に確認せねばという負担を感じる」「Slackを利用していない人との間でコミュニケーションに齟齬が生じてしまっている」「安全性的・組織統制的にどこまでの情報をSlackで共有して良いのか戸惑いを感じる」「その他」であり、「その他」は自由記述を付記することが可能である。

選択肢のうち、「Slackを利用していない人との間でコミュニケーションに齟齬が生じてしまっている」「安全性的・組織統制的にどこまでの情報をSlackで共

表5 コミュニケーションへ良い効果をもたらしているか？（新設の項目）

属性	非常にそう思う (%)	そう思う (%)	どちらともいえない (%)	そうは思わない (%)	全くそうは思わない (%)	回答者数 (人)
全体	29	59	10	2	0	59
教員	13	88	0	0	0	8
技術職員	29	55	13	3	0	31
事務職員	35	55	10	0	0	20

表6 Slack 導入メリット（複数回答可、括弧内は昨年の回答）

属性	情報量 (%)	リアルタイム (%)	違う人 (%)	異なるビル (%)	通知 (%)	その他 (%)	回答者数 (人)
全体	63 (71)	85 (76)	36 (27)	44 (41)	8 (10)	5 (15)	59 (41)
教員	63 (100)	88(100)	38(67)	63(83)	38(50)	0(17)	8 (6)
技術職員	61 (67)	84 (71)	39 (29)	39 (38)	0 (0)	3 (19)	31 (21)
事務職員	63 (64)	85 (71)	30 (7)	45 (29)	10 (7)	5 (7)	20 (14)

表7 Slack 導入デメリット（複数回答可、括弧内は昨年の回答）

属性	わかりにくい (%)	情報量 (%)	リアルタイム (%)	使っていない人と齟齬 (%)	組織統制 (%)	その他 (%)	回答者数 (人)
全体	17 (27)	34 (27)	25 (27)	46	29	10 (29)	59 (41)
教員	25 (17)	38 (17)	13 (0)	75	13	13 (50)	8 (6)
技術職員	23 (33)	45 (29)	35 (33)	48	29	10 (24)	31 (21)
事務職員	5 (21)	15 (29)	15 (29)	30	25	25 (29)	20 (14)

表8 有償版の便利な機能（複数回答可、括弧内は昨年の回）

属性	期間無制限検索 (%)	ゲスト招待 (%)	共有チャンネル (%)	その他 (%)	回答者数 (人)
全体	58 (41)	25 (10)	32	0 (0)	59 (41)
教員	75 (67)	50 (50)	68	0 (33)	8 (6)
技術職員	71 (48)	23 (5)	19	0 (14)	31 (21)
事務職員	30 (21)	25 (0)	32	0 (14)	20 (14)

有して良いのか戸惑いを感じる」は今年度あらたに付け加えた項目である。これらは前年度のアンケート前には明示的には想定していなかったデメリットであるが、自由記述欄でそれぞれ複数の同様の指摘が見られたため、今年度の追加項目としている。

本質問の回答結果で注目すべきは「Slack を利用していない人との間でコミュニケーションに齟齬が生じてしまっている」という選択肢が新設にも関わらず、もっとも高い割合となっていることである。これは、組織内での Slack の利用が拡大したために、却って積極的に利用しない層とのギャップが大きくなってしまったことを示唆している。この解決策としては現在一部のグループで行っている一日一回の確認のルール化を全組織的に拡大することや、現在発言していない人が気軽に発言できるように利用ポリシーの明確化を行うことが考えられる。

一方で、前年度は一定数存在した「情報の入手先がわかりにくくなった」という回答は減少した。これは、ツールの利用に習熟することで効率的な利用が可能となったことが可能性として考えられる。

また、本組織で用いている Slack のライセンスは有償版であるため、その有益性に関する質問（「情報環境機構は有償版の Slack です。有償版の機能で便利だと感じた機能があればお答えください」、複数回答可）も行っている（図8）。回答の選択肢は、「期間無制限の検索機能」「閲覧先を制限できる「ゲスト」の招待が可能になったこと」「他チームとの共有チャンネルが利用できること」「その他」であり、「その他」は自由記述を付記することが可能である。

期間無制限検索を便利と感じる者の数は半数を超え、ゲスト招待・共有チャンネルの利用も評価するものが一定割合で存在した。本組織では前述の通りゲスト招待・共有チャンネルを積極的に利用しているため、それが評価に繋がっているものと考えられる。

アンケートの最後の質問は「その他 Slack 導入について意見があればご自由にお書きください」という自由記述とした。自由記述では、障害発生時を始めとする問題解決に有効であるという趣旨の意見が多く、全学単位での展開を求める声も複数上がった。一方でアカウント管理体制に関する不安や積極的でない利用者

へのアプローチなど、運用面での課題を指摘する声もあった。

5 おわりに

Slack 導入によるコミュニケーション改善のための利用方法の設計と、導入後の利用状況の推移、およびユーザアンケートを元にした利用形態の確認と評価について述べた。導入後はアクティブユーザー数は前年度のアンケート時から更に増加しており、アンケート評価では、教員・技術職員・事務職員の全属性でコミュニケーション改善に対する効果について高い評価が得られ、特に事務職員の評価が前年度から大幅に向上した。一方で、Slack を積極的に利用していないユーザとコミュニケーションで齟齬が発生してきていることが認識されはじめており、アンケートへ答えない構成員（潜在的な低評価者の可能性が高い）の意識調査と利用推進が、今後の大きな課題として残されている。

今後については、Slack の組織的な利用に関するルール整備を進め、メールと同程度かそれ以上基幹的なサービスとして定着させることが目標である。また、学内・学外の組織に向けて、本組織での利用経験を元に積極的な情報提供を行うことも目指している。そのための基礎データとして、本稿と同様のアンケートを次年度以降も定例的に実施し、継続的な利用調査を行っていく予定である。

参考文献

- [1] 森村吉貴、渥美紀寿、古村隆明、”多様な構成員を持つ大学 ICT 組織への Slack 導入によるコミュニケーション改善試行”，2018 年度大学 ICT 推進協議会年次大会，MC1-4，2018
- [2] ”法人全体で ICT を活用した働き方改革を実践 日本の大学で初めて、全ての教職員に「Slack」導入を決定”，近畿大学 NEWS RELEASE, https://www.kindai.ac.jp/_hide/_news-pr/news_release/2019/07/017225.html, 2019
- [3] ”第 1 特集はじまっています。ChatOps 導入を決めた 7 社の成功パターン”，Software Design 2016 年 1 月号，技術評論社，2015

付録 A アンケート原稿

情報環境機構 Slack 利用アンケート

所要時間の目安：5 分～10 分程度

入力期間：X/XX XX:00 まで

*本アンケートではアカウントに紐づくメールアドレスが記録されます

属性分析のため、記入内容が個人と結びついた形で発表されることはありません

【*必須】

Slack をチェックする頻度を回答してください*

- ほぼ常時確認している
- 1 日数回程度
- 1 日一回 ～ 週に数回程度
- 通知があれば
- ほぼ見ていない

Slack を利用している端末を全て回答してください*
(複数回答可)

- PC / Mac のブラウザ上
- PC / Mac のアプリ
- スマートフォンアプリ

一番良く利用する端末を回答してください*

- PC / Mac のブラウザ上
- PC / Mac のアプリ
- スマートフォンアプリ

Slack の導入により、導入以前よりコミュニケーションが改善されましたか？*(複数回答可)

- 改善された
- どちらとも言えない
- 悪化した
- 現職場に参加した時から Slack が導入されており、比較できない

全体的に見て、Slack の利用はコミュニケーションに良い効果をもたらしていると思いますか？ *

- 非常にそう思う
- そう思う
- どちらともいえない
- そうは思わない
- 全くそうは思わない

Slack 導入により感じるメリットについて、チェックしてください (複数回答可)

- 入手できる情報量が増えた
- よりリアルタイムな情報交換が可能になった

- 普段はやりとりをしない人とのコミュニケーションが増えた
- 自分と異なる部屋・ビルの人とのコミュニケーションが増えた
- 通知の強弱がつけられるので情報の取捨選択が容易になった
- その他:
(自由記述欄)

Slack の導入により感じるデメリットについて、チェックしてください (複数回答可)

- コミュニケーションの選択肢が増え、情報の入手先がわかりにくくなった
- コミュニケーションの選択肢が増え、情報確認の量的に負担を感じる
- リアルタイム性が高いため、常に確認せねばという負担を感じる
- Slack を利用していない人との間でコミュニケーションに齟齬が生じてしまっている
- 安全性的・組織統制的にどこまでの情報を Slack で共有して良いのか戸惑いを感じる
- その他:
(自由記述欄)

情報環境機構は有償版の Slack です。有償版の機能で便利だと感じた機能があればお答えください (複数回答可)

- 期間無制限の検索機能
- 閲覧先を制限できる「ゲスト」の招待が可能になったこと
- 他チームとの共有チャンネルが利用できること
- その他:
(自由記述欄)

その他 Slack 導入について意見があればご自由にお書きください

- (自由記述欄)